環境・社会理工学院　建築学系

塚本由晴教授

インタビュー第7弾

『私は進路をこうして決めた』

「私は進路をこうして決めた」第7弾として、学生時代にどのように考えて進路や研究テーマを決定したのか、塚本由晴先生に詳しく伺いました。また、インタビュー後半では先生が現在行っているプロジェクトのお話や、現在の社会や東工大が抱える課題についてもお話いただきました。是非ご一読ください。（2021/06/25インタビュー実施）

塚本由晴先生　プロフィール

環境・社会理工学院　建築学系教授を務める。1987年に東京工業大学建築学科を卒業後、パリ建築大学ベルビル校に留学。1992年に貝島桃代とアトリエ・ワンを設立。その後、1994年に東工大博士課程を修了し、ハーバード大学、UCLA等で客員教授を経て、2016年より現職。専門分野は建築意匠、建築設計。

建築家を目指した理由

―なぜ建築家になりたかったのでしょうか。

大学入学時は建築の設計や建築家という仕事に対して明確なイメージがなく、どちらかというとエンジニアに近いものだと想像していました。しかし、大学3年生のとき私の師匠である坂本一成先生が、非常勤講師に来てくれた建築家を「現在最もビビッドな作家の一人……」と紹介し、建築家は作家なのだということに気づきました。そこから、作家のように自らの意思とデザインで作品を創り上げる建築家という仕事に期待を膨らませるようになりました。

3年生の設計製図の授業では、社会の第一線で活躍している建築家が課題を出す前に自身の作品をスライドショーで見せてくれました。それらの建築は、どれも非常に自由に考えられており、独自の思想があり、社会に対する構えがしっかりあるものでした。これはまさに「作家」の営みだと思い、こういう人になりたいなと思いました。3年生の設計製図では自由な発想を要求される設計課題が多くなりました。自分の興味や発想に基づいて自由に設計をするのがとても楽しく、また、同級生が意外に苦心しているのを見て、自分は設計に向いているかもしれないと思うようになりました。そこから建築家になりたいという思いが一層強くなりました。

学部時代の生活

―学部生のときはどのように過ごされましたか。講義や自主的な学修が研究室配属に与えた影響や、部活が研究に活かされた経験などはあるでしょうか。

高校時代は運動ばかりしていて文化や哲学、社会のことを全然知らなかったので、読書、展覧会巡り、そして映画を1950年代ぐらいまで遡って見

ていましたし、新聞をよく読むようになりました。60年代は学生運動もあり、世界中で若者の文化のうねりが非常に高まった時期でもありました。その頃の音楽や映画や美術は、本当に貪るように見ましたよ。第二次世界大戦から80年代初頭まで、どのように辿ったかを少しずつ学んで「自分たちは今どこにいるのか」ということを考えていました。

大学4年生ときの都市に関する研究

―学部時代、どのように研究テーマを決められましたか。

4年生のとき坂本一成先生の下で学びたいと思い、建築意匠論を扱う坂本研究室に所属しました。そのときの坂本研究室では「建築のイメージ論」という図像がもたらす意味の構造についての研究が行われていました。「空間」という最も一般的な概念とは別の批評言語を用いて、建築のデザインを開拓する試みでした。私は、渋谷などの都市的な現象に興奮していたので、建築のイメージ論の延長のつもりで、「都市のイメージ論」を研究しました。100人ぐらいに自由に描いてもらった簡単な都市イメージを対象に、構成要素や図法などを分析し、パターンを抽出しました。ただ建築に比べると都市は対象化しにくく、環境として意識せずに没入しているので、なかなか分析しにくかったです。

大学院での新たな研究テーマ

―大学院ではどのように過ごされましたか。

大学院では、建築だけでなく、小説、アートや映画などの文化的な表現について、友達とよく議論しました。すると、「表現というものには必ず形式があり、形式なしに表現を議論できない」ということがわかってきました。私がその頃考えていた「形式」というものは、建築だけではなく、

表現全般に当てはめられるものを想定していました。例えば、相反するものをぶつけて新しいものを作る。あるいは違うものの中から似たものを見つけ、うまく橋渡ししハイブリッドを作る。こうした表現は分野にかかわらず成立する「形式」と言えます。

ここから、「美術でも音楽でも映画でも建築でも演劇でも、どの分野でも通じる形式を研究したい」と申し出たところ、坂本先生は「それなら、まず建築の形式をやるべき。」と諭され、その研究をすることになりました。そのころは「空間」という概念が濫用されて「～空間」というのが数多く語られていましたが、坂本先生は「建築の空間」を捉える上で最も根本的で信頼できるものとして「建築の構成形式」を捉えていたと思います。

留学後に都市・東京の面白さに気づく

―大学院時代、その研究以外で関心があったことはありますか。

あいかわらず都市に対する関心は高く、大学院時代にパリ・ベルヴィル建築大学に留学し、ヨーロッパ的な建築と都市と社会の在り方を肌身で感じたことがその後の展開を決めました。留学を終え、成田空港から東京まで戻ってくる間に電車の窓から外を見たときの衝撃を忘れられません。パリで1年過ごした私の目には、東京が今まで以上に不思議な街に映りました。

東京にある「ダメ建築」

書籍
メイドイントーキョー

私はこの違和感をずっと残したいと感じ、旅行者のふるまいを続けカメラを持ち歩いていました。そうすると西新宿にある東京都庁のような有名建築家の作品よりも、誰が作ったかわからない変な建物により「東京らしさ」を感じました。例えば高架下のショッピングモールや生コンの工場に隣接するミキサー車のドライバーのアパートなど。そういうものの方が圧倒的に「東京」だと感じました。そういう変な建築を「ダメ建築」と呼んで仲間と収集し、「メイドイントーキョー」という展覧会で発表しました。この展覧会をもとに日英併記の本を執筆しました。

「コモンズ」の研究

―現在はどのような活動をされているのでしょうか。

2015年にマイクロパブリックスペース[1]のプロジェクトや各都市のパブリックスペースを、人々が領有している様子について議論した「コモナリティーズ」という本を執筆しました。これには誰のものでもない共有物である「コモンズ[2]」という概念が根幹にあり、現在研究室の大きなテーマになっています。コモンズは近代以前に各地に存在していましたが、近代化や資本主義化によりやせ細ってしまいました。それが原因で金が無かったら野垂れ死ぬような今の東京になっています。それを恐れて、人々は仕事に

[1] さまざまな地域の歴史、文化や環境、そこに身を置く人々のふるまいの調査から作られた小さな構造物や家具によるインスタレーション作品。
引用元：Atelier Bow-Wow, マイクロ・パブリック・スペースとは？, https://www.hiroshima-moca.jp/bowwow/mps/, （参照 2022-6-28）

[2] 共同体の構成員が共同に使用し、管理する山・茅場・海などの入会地・共有地・共有資源のこと

しがみつき、学生は大学の研究そっちのけで就活してしまうわけです。（笑）そういう世の中自体がおかしいと思います。そのような背景から、解体されたコモンズをどうやって再構築するのか、そこに建築の設計はどのような役割を担えるのかを研究・実践しています。

産業を変える研究

地球生命研究所(ELSI)新棟

—系所属や研究室配属をする東工大生に対するメッセージなどいただけないでしょうか。

日本の社会は産業と暮らしの関係が転倒していると思います。暮らしのために産業があるのではなく、産業を維持するために暮らしが奉仕させられている。これを見直すためには、産業を批判的に変えていく研究を東工大生にはしてほしいです。

インタビュアー（学修コンシェルジュJr.）の紹介

住友啓允(修士課程1年　工学院機械系機械コース)

濵岡遼真(修士課程1年　工学院機械系エネルギーコース)

2019年度までは東京工業大学 学修コンシェルジュLINE公式アカウントで記事の配信を行っていました。2020年度からインタビュー企画『私は進路をこうして決めた』の記事制作に取り組んでいます。